

■鼎談



冬柴鐵三(ふゆしば てつぞう)
1936年中国(旧奉天)生まれ。60年関西大学法学部法律学科卒業。61年司法試験合格、64年御堂筋法律事務所開業。86年旧兵庫2区から公明党公認で衆議院議員に初当選、以来7期連続当選。決算委員長、自治政務次官を務める。98年11月から2006年9月まで公明党幹事長。06年9月国土交通大臣に就任。関西大学校友会尼崎支部顧問。

◆貧困に負けない「強い男になる」ために

森本 今日は大臣と膝を交えてお話し合いができることに、心より感謝しております。強い関西大学を宣言して着々と成果を上げているさなかに、創立120周年の節目を迎えることができました。母校の「現在」をご覧になって、率直なご感想からお聞かせください。

冬柴 太陽が一周して、また日が昇るというような印象です。120年という時を刻んで、今また日が煌々と輝いているように感じます。学長も頑張っているし、それを法人として理事長が支えておられる。関西大学の近年の飛躍には華々しい力を感じます。

河田 ありがとうございます。かなり長い間、低調だったスポーツもようやく強くなってきて、最近是在学生のみならず、卒業生の関西大学に対する帰属意識がより強くなった気がしています。

冬柴 同感です。私はずっと関西大学二部(夜間部)卒業ということに誇りを持ってきました。どこへ行っても、私が今あるのは関西大学のお陰と公言しています。私が入学したのは昭和31年4月。建学120年のうち50年を、関西大学と共にあるわけで、関西大学は私にとって人生そのものと言ってもいいくらいです。

森本 大臣は、つらい引き揚げ体験をお持ちだと伺っています。そういう方が関西大学に学び、弁護士を志されたことを、関大人として誇りに思います。

冬柴 私は旧南満州鉄道の技師を父に持ち、中国の奉天で生まれました。終戦時に家族4人、猛爆の中の逃避行を余儀なくされ、両親と姉からはぐれてしまいました。わずか9歳ですから、不安で恐ろしくて、母や姉の名を呼び、泣き叫びながら走りま

した。幸運にも20日後に家族と再会できたのですが、母は心労のあまり衰弱し、間もなく亡くなりました。「戦争ほど残酷なものはない」と、心に深く刻みつけた思い出です。

日本に引き揚げてからは、まさに赤貧の少年時代でした。国全体が貧しかった時代ですが、食べるものにも困る状態で、三重県の中学を卒業する時、将来は何としても「強い男になりたい」と考えたのです。子ども心に、強い男すなわち商売人と思い、家出同然で大阪に出てきました。商売なら大阪だというわけです。大阪市立扇町第二商業高等学校を卒業後、商売には法律が役立つに違いないと考え、関西大学二部法学部に入学しました。

◆司法試験合格を目指し、ひたすら学んだ日々

冬柴 弁護士になろうと決めたのは3年生になる前で、やはり貧しい庶民の味方になりたいという信念からでした。天六学舎の司法試験研究室の末席に座らせていただき、試験勉強を始めました。22歳で高校の同窓生と結婚してからは、女房に家事を任せて勉強に集中しました。仕事を終わると急いで通学し、帰宅するとひと眠りして、女房に朝1時に起こしてもらってから出勤しました。こうして卒業翌年の昭和36年に、司法試験に合格しました。

河田 関西大学には苦学して卒業され、そのご苦労をバネにして成功された方が大変多いのですが、大臣はどのような学生でしたか。

冬柴 自分で言うのもおかしいのですが、かなりの優等生だったんです(笑)。仕事が終わったら走って大学に行き、友人5〜6人で教壇の前の席を独占するんです。熱心に授業を聴き、全部ノートに取りました。国際法の川上敬逸教授は非常に厳しく、「1年や2年で国際法が分かるわけがない」とおっしゃり、単位を落とす先生として知られていましたね。ある時ノートを提出すると言われたことがあって、みんな大パニック。同級生たちは私のノートを借りに来て、あわてて写していました。私は司法試験を受けると決めてからも、試験に関係のない教養科目も結構勉強しましたね。成績は良かったので、卒業式では総代を務めました。

森本 仕事や試験勉強で忙しかったはずなのに、首席で卒業とは驚きます。当時の天六学舎は、夢を持つ学生が集まっている学び舎でしたね。

冬柴 周辺の街も、関大の気風そのものでした。庶民的で、近くに飲み屋さんもありました。当時、地下鉄工事をやっていた、夜中も真っ黒になって働いている方が大勢おられましたね。夜遅く大学から下宿に帰る道すがら、ああ、みんな頑張っている、僕もやってやるぞと気持ちが奮い立ったものです。

日本の国がおかしいと思うのは、これだけ地震や津波、台風などの天災が多いのに、危機管理に対応できる人材を育成する国の制度がない点です。



森本靖一郎(もりもと せいいちろう)
1932年奈良県生まれ。関西大学文学部、法学部卒業。母校に奉職し、67年に関西大学教育後援会幹事長に就任。「大学と家庭のかけ橋」をモットーに、大学と父母間に信頼の絆を作り上げた。飛鳥文化研究所の開設にも尽力。事業局長、常務理事を経て、2000年専務理事、04年10月理事長に就任。「強い関西大学」を提唱している。

◆過去回顧的な仕事から将来展望的な仕事へ

森本 大臣は最初から青雲の志を抱いて政治家になられたのではなく、弁護士から転身されました。何かきっかけがあったのでしょうか。

冬柴 私は友達と日本一の弁護士事務所をつくろうと決意して、最初6人で大阪に共同事務所を開きました。今は弁護士が42人になっています。事務職の方も入れると約100人、東京の霞が関ビルにも100坪の事務所を出しました。私はその事務所と終身契約を結んでおり、生涯弁護士を続けるつもりでした。

ところが49歳の時に、公明党から出馬要請がありました。私がある時に考えたのは、弁護士は、いわば過去回顧的な仕事だということ。過去に起こった事件を法廷で再現して、社会正義を実現する。しかし、政治家は将来展望的な仕事です。目的はどちらも一緒で、基本的人権を擁護し、社会正義を実現すること。49歳まで過去回顧的にやってきたのなら、残りの人生は将来展望的な仕事に懸けてみようかと決断しました。何より、赤貧の中で育ちましたから、弱い立場の人を擁護するには、政治による社会変革が必要だと感じたのです。

創立120周年、そして新たな挑戦

「原石を磨き輝かせるのは教育の力だ」

冬柴 鐵三 ◆国土交通大臣
森本 靖一郎 ◆理事長
河田 悌一 ◆学長

2006年11月4日、関西大学は創立120周年を迎えました。記念式典で祝辞を述べられた冬柴鐵三・国土交通大臣をゲストにお迎えして、新たな一歩を踏み出した関西大学の伝統と未来像を語り合いました。貧しかった少年時代、充実した学びの時を持ち得た関西大学の学生時代を振り返りながら、政治家としての使命を熱く語る大臣。関西大学の過去と未来をつなぐ鼎談をお届けします。



河田 梯一(かわた ていいち)
1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。86年関西大学教授。文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。文部科学省大学設置・学校法人審議会委員。社団法人日本私立大学連盟常務理事。財団法人大学基準協会理事。

来春創設の新学部でも、命や環境の視点からものを考えられる人、また地方、国、世界のために政策立案できる人を育てていきたいと思っています。

旧兵庫2区は、旧社会党の土井たか子さんら強豪の中での選挙で、関西大学校友会の力は大きかったですね。7回挑戦して、いつも真っ先に代々の理事長に来ていただき、「関大党」の冬柴をよろしく」と応援していただきました。関大には本当に感謝しています。

河田 OB・OGの活躍は、私たち関西大学の名誉でもあります。ところで、弁護士としてのさまざまな経験が現在、政治家としての活動に役立っていることもおありになるのでしょうか。

冬柴 たくさんあります。例えば、つい最近まで法律相談、市民相談などには国費が出ていなかったんですよ。弁護士になった時、私は、貧困な人にとって弁護士の敷居が非常に高いことが気になりました。裁判をする権利は憲法ですべての人に保障されているはずなのに、裁判費用の扶助制度がなければ、庶民は弁護士を雇うことも、裁判もできません。国がどうしてやらないのかという義憤もあり、初当選した時(昭和61年7月)、真っ先に法律を作ろうと動きました。国の補助金で弁護士が付くリーガルサービスの制度を、翌年の憲法記念日に発表しました。

お金がかかりますから随分反発が大きかったんですが、あきらめずに法務委員会で16回、予算委員会で7回、質問に立ちました。この制度の先進国であるイギリスにも、今、大阪弁護

士の会長になっている関大OBの小寺一矢さんと一緒に視察に行きました。彼は私が質問するたびに傍聴してくれました。こうして「民事法律扶助法」が成立し、法律扶助制度が整いました。それを引き継いで、この10月に私の念願だった日本司法支援センター(法テラス)が稼働を始めました。やっとここまでできたという感慨がありますね。

◆未来へ向かって、改革を断行する関西大学

森本 お話を伺って、困っている人や貧しい人を助けたいという、若いころからの一貫した志を感じました。このたびは国土交通大臣という要職に就かれましたが、どのような方針で臨まれますか。

冬柴 日本は天災が多い国ですから、災害を最小限に抑えるために、何をなすべきか考え、取り組んでいます。また、日本は少子高齢化社会で、人口減少期に入りました。当然、消費は収縮しますから、日本の狭い国土の中だけでは活力が失われます。そこで私は、技術の開発は日本で行い、生産拠点や販売拠点は中国大陸をはじめとする東南アジア、世界に広げるべきだと考えています。日本は四方が海ですから、ものを運ぶにしても、人が行き来するにしても海を越えなければなりません。まず国際港湾を整備して、生産拠点と結ぶネットワーク、例えば高速道路や新幹線なども整備し、国際競争力を高めること。それが21世紀の日本を豊かにすることになります。

もう一つは、地方の問題です。いま三大都市圏と地方との格差が取り沙汰されていますが、頑張る地方を応援したい。例えば、今まで道路予算は国が配分を決めていましたが、地方に主体的に決めていただく方向にする。真に必要なとされる公共投資とは何かを重点的かつ効率的に見極めて、必要ならば断行するという方針です。

森本 そのお考えに大賛成です。国と大学では規模が違いますが、私は理事長就任に際して「強い関西大学」をつくと宣言し、学長とスクラムを組んで改革を断行し、少子高齢化対策にも取り組んでいます。

例えば、日本初の「カレッジリンク型シニア住宅」の創設。アメリカでは既に始まっているのですが、シニア住宅で、入居者を対象に大学の講座を開講したり、入居者の方に学生と一緒に大学の授業を受けていただく制度です。まずは本学の文学部と神戸のシニア住宅とが提携し、08年からスタートする予定です。キャンパスが率先して「知」のネットワーク、つまり「知縁コミュニティ」を形成し、少子高齢化社会に貢献します。

また、高槻駅前の新キャンパスで「危機管理士」のようなライセンスが取れる仕組みを立ち上げたいと思っています。日本の国がおかしいと思うのは、これだけ地震や津波、台風などの天災が多いのに、危機管理に対応できる人材を育成する国の制度がない点です。弁護士や公認会計士などと同じように、「危機管理士」といった国家資格制度が必要だと思います。

冬柴 それは斬新な発想ですね。政府としても、ぜひ前向きに検討させていただきます。

河田 関西大学では、他大学に先駆けて「安心・安全のための大学」というものを考えています。高槻市は安心・安全の都市づくりを目指していますから、共同でやっつこうという話です。だから、OBが国土交通大臣に就任されたことも、心強く感じています。

◆発展と改革の根底にある建学の精神「学の実化」

河田 大臣が卒業証書を受け取られた、当時の岩崎卯一学長は、敗戦後まもない昭和22年5月、「学生諸君に告ぐ」という文章を大学新聞に寄せています。その中で「関大ルネッサンス」という言葉を使って、大学改革を呼びかけておられるのです。私はその言葉を借りて、21世紀という新しい知の時代の要請に応える大学改革を呼びかけています。いわば「関大ルネッサンスをもう一度」というわけです。

前述の少子高齢化対策のほか、工学部の再編、新学部の創設などに取り組んでいます。現在の工学部11学科は来年度から、「システム理工学部」「環境都市工学部」「化学生命工学部」の3学部9学科にダイナミックに再編します。また、実践的な政策立案力を養う「政策創造学部」を千里山キャンパスに新設します。

これらの改革の根底にあるのは、建学の精神である「学の実化」です。大阪には庶民の文化が開き、江戸幕府の朱子学的な官僚の学問ではなく、京都の公家や僧侶の学問とも異なる、合理的にして社会に有用な庶民の学問の伝統があります。貧民救済を唱えた大塩平八郎が学んだ陽明学に由来する「知行合一」の精神が、「学の実化」にも受け継がれていると思います。来春創設の新学部でも、命や環境の視点からもの考えられる人、また地方、国、世界のために政策立案できる人を育てていきたいと思っています。

森本 私は、同じく岩崎卯一先生の「関大一家」という言葉に共感し、その思想を「子どもの母校はわが母校」として引き継いで、父母の組織「教育後援会」を作りました。さらに、卒業生・父母の同窓会と称して「千寿会」を作りました。大学生、大学生の父母、卒業生の親たちも、みんな「関大一家」というわけです(笑)。

河田 その、いわゆる「関大一家」には、最高齢91歳で社会貢献をなさっている遊上義一さんという方もおられます。一生、関大を支えてくださっています。

冬柴 関大OB・OGは本当に各界で活躍しています。地方公務員にも多く、あちこちの市役所に職域会がありますからね。

森本 関大OB・OGは、国会議員として8名がおられます。そして、大阪府下では池田市、茨木市、摂津市、守口市の市長や大阪府議会議長など府議会議員、市議員など多数、さらに大阪府・大阪市には3~4,000名もの校友職員がおられます。また、兵庫県下では淡路市、小野市、加古川市、神戸市の市長をはじめ、県の役職者や議員にも校友がたくさんいらっしゃいます。実業界では大坪文雄松下電器産業社長、吉野伊佐男吉本興業社長、南部靖之パナソニック代表、中谷修己きんでん社長など、社長も大変な数に上ります。



河田 スポーツでも強さを発揮してくれています。フィギュアスケートの高橋大輔君と織田信成君は、多くの世界大会でトップを競っています。今年7月、高槻市に開設した関西大学アイスアリーナは、日本の大学で初めての国際競技規格のアイススケートリンクです。

森本 オープニングセレモニーでは、本学の高橋大輔君、織田信成君、平井絵己さんをはじめ、招待選手の村主章枝さん、安藤美姫さん、中野友加里さんらトップスケーターによるエキシビジョンが華々しく行われました。スケートリンクは大変な費用がかかるというので反対が多かったんですが、信念で取り組めば、道は開けるものです。

冬柴 アイスアリーナのオープニングセレモニーには私も出席し、小泉首相の親書を讀ませていただきました。

森本 本学会計専門職大学院の宮本勝浩教授の試算によると、アイスアリーナのPR効果は多大で、近畿経済への経済波及効果は16億6,552万円に上るとのことで、澤田亜紀さん、北村明子さん、金彩華さんという高校3年の有望女子3選手も、こぞって本学に入学することになっています。

◆人は皆、ダイヤモンドの原石。夢の持てる教育を!

河田 性善説を唱えた孟子は、物事を成し遂げる場合に重要な要素として、天の時、地の利、人の和という3つのものが必要だと言っています。と同時に、成功するには人の和を得ることが何より大切で重要だと。このたびの120周年は、天の時があり、大阪という地の利があり、さらにまた、たくさんの人の和により、実現したものだと思心から感謝しています。

冬柴 まさに「関大党」の力が結集されたわけですね。

森本 さらに、JR高槻の駅前で、幼児教育から初等・中等・高等教育、そして生涯教育までの一貫教育を実現させます。

また、関西大学を卒業した人を対象に、生涯にわたる就業支援を始めました。国籍は変えることができても、母校は変えることができません。生涯、固い絆で結ばれているのです。創立120年の記念すべきこの日に、さらに強い関西大学を目指して「関西大学から世界へ」を宣言いたします。そして、卒業生は世界へと羽ばたいていきます。

冬柴 人は皆、ダイヤモンドの原石です。原石のまま埋もれさせてしまうのではなく、それを磨くのが教育の力です。もちろん、本人の精神力がなければ磨くことはできませんが…。私は貧しかったけれど、学問する中で一度も将来に不安を持ったことがなかったんですね。食べ盛りの高校時代に一日2食しか食べられませんでしたし、電車賃がないから、よく歩きました。でも、心は希望に燃えていました。今の時代に、どうか夢の持てる教育をお願いします。

森本 はい。大臣のご協力もいただきながら、世界の人々が幸せを感じられる社会づくりに貢献します。今日はありがとうございました。